

高齢者の自立に関する研究

藤 田 智 之

〔抄 録〕

日本において、高齢者の割合は全体の17.3%を占めており、福祉の領域では、高齢者問題は早急な対応、解決を迫られている。経済的な問題、雇用、保健、介護等その対処しなければならない課題は幅広く存在する。とくに、高齢者の自立を考える時に、塚本哲人は『高齢者教育の構想と展開』¹⁾の中で、経済的自立と精神的、身体的自立という2つの視点が存在することを論じている。自立を考える場合、外部からの支援だけでなく内部からの自己創出、自己開発も必要になってくるのである。

本論文では、自立、とくに生きがいに焦点あて、高齢者の生きがいについて現状について分析する。とくに施設に入居している高齢者に視点をあて、高齢者はどのような意識をもっているのか、施設はどのような取り組みをおこなっているのか。また、介護士と高齢者の意識の違いはあるのかについて論じる。

キーワード：生きがい、入居者、生涯教育、高齢者、自己実現

はじめに

今日の日本において、個人の状況を考える時に、経済面や個人の意識の面においても、大きな変化の時期を迎えている。つまり、少子高齢化社会を背景として、家族の構成や機能、雇用などが大きく変化し、個人が家族や職場などひとつの場所に帰属していくことが困難となりつつある。そのような状況の中で、個々人の努力が求められてきている。一方、個人の意識の中でも、それに適合した自己実現の場を望む志向が高まってきている。

このような状況の中で、自己の能力を発揮し、個性を活かして生きていくことが個人の人生の充実と社会の活性化につながると考えられる。このためには、家族・職場・地域社会等の複数の連携が必要となってくると考えられる。

また、これらの場所を通じて個性を活かして生きるためには、これを支える基盤として、個

人の心身の自立、経済的自立を確保しなければならない。経済的な自立を達成させるためには、年金や保険などの福祉政策の充実があげられる。これにより、生活基盤の安定や福祉政策による援助などによって高齢者に自立と安らぎを与えようと考えられている。

しかしながら、心身の自立は外部から支援できることと、自己の内部から感知するものと両方が必要なのである。内部からの感知するものとして「生きがい」があげられる。生きがいをもち、生きていく目標や意義、役割などを意識し、残りの人生を有意義に過ごせるのではないかと。また、近年の高齢者の自殺の多くは、病苦と精神的・社会的孤独、つまり生きがいの喪失状況にある高齢者が多いと言えのではないだろうか。

本論文では、高齢者の自立という視点から、人生の目標や生きている楽しさなど高齢者の生きがいと生涯教育の重要性について言及する。とくに、施設に入居している高齢者を中心に、高齢者の生きがいと施設でおこなわれているレクリエーションの実態、職員の意識について論じる。

1. 高齢化社会の課題

厚生労働白書の中で、高齢化社会に進展する推移を示した表を掲載している。表1を見ると、65歳人口の割合は、0.5～0.6%と増加の傾向にあり、現在では全体の割合の17%であり、3年後には20%近くになると予想している。2035年には、人口の30%を超えるような人口形態になっていると予想している。このような状況、予想から考えると高齢者の問題は早急に解決しなければならないものといえる。

表1 高齢者人口と割合

	総 数 (千人)	65歳以上の人口 (千人)	65歳以上の割合 (%)
平成 2 (1990)	123 611	14 895	12.0
7 (1995)	125 570	18 261	14.5
8 (1996)	125 864	19 017	15.1
9 (1997)	126 166	19 758	15.7
10 (1998)	126 486	20 508	16.2
11 (1999)	126 686	21 186	16.7
12 (2000)	126 926	22 005	17.3
17 (2005)	127 708	25 392	19.9
22 (2010)	127 473	28 735	22.5
27 (2015)	126 266	32 772	26.0
32 (2020)	124 107	34 559	27.8
37 (2025)	121 136	34 726	28.7
42 (2030)	117 580	34 770	29.6
47 (2035)	113 602	35 145	30.9

出典：厚生労働省のホームページより作成²⁾

そこで、高齢化社会への対応として、大きく次の3つに整理できると考える。第1点は、就職、雇用の問題として、少子高齢化による労働人口の変化への対応である。現在は、景気の低迷と失業者の増加が見られ、若年労働者の不足による雇用形態の変化が早急に解決しなければならない問題とはなっていない。しかしながら、65歳で定年を迎えた高齢者でも元気で働くことのできる人は多く、まだまだ社会への貢献を求める人が増えることは間違いない。これらのことから、働く意志と能力のある高齢者の雇用の安定と促進を図ることは重要であると考えられる。再就職や職業訓練など、高齢者が働ける環境整備も押し進めていかなければならない課題のひとつであろう。第2点は、福祉の問題である。高齢者の福祉を論じるときに、年金問題や医療、保健、介護ということが問題視されてきた。この点は、高齢化社会への対応としては重要な領域であり、今後ますます大きくなっていくことが考えられる。例えば、寝たきり老人やばけ老人、ひとり暮らしの老人などの養護、介護について家族だけでは対応できない状況をどうするのか。また、健康で正常な高齢者の増大にも配慮が必要とされる。第3点は、生きがいという問題である。近年は、定年退職の年齢の引き下げや平均寿命の延びなどから、仕事を辞めてから15～20年以上も生活していかなければならない状況にある。増幅する高齢者の生活期間を豊かに生き抜くことがどれほど重要かは周知の事実である。老後の無為を克服して生活するために、現実的には仕事をもつことが考えられる。年金支給時期の延長や就業意欲や所得欲求が強いことなど、内外的にも仕事に対する欲求は高いのである。そして、子育てを離れた婦人も、外に出て働きたいという傾向は強くなっている。このように「仕事」に従事することは、高齢者の生きがいへの動機付けとなると考えられる。また、老人会や地域のサークルなど生きがいを生み出すきっかけとなることもちがいないであろう。

就業意欲や所得意欲を満足させる就労と自分の責務と考えられる働き場という「仕事」を充実させ、各会の交流の機会を提供することが高齢化社会への対応としての生きがい対策は重要な課題である。しかし、高齢者の個々の幸せという意識は、経済的な安定や健康などの安らぎが獲得されなければならない。安らぎだけでなく、同時に生きがいも確保されなければ幸せという意識は生まれないのではないだろうか。安らぎは、外部から支援することができるが、生きがいは個々人の内部からの創出である。生きがいを感じることができる資質の育成と自己開発、自己実現という教育や学習の営みが重要となる。余暇時間の増大など、高齢者にとって余暇の活用と無為の克服は大きな課題といえる。そのためにも、高齢者の学習活動を支援する生涯教育・学習の施策が生きがい対策に必要不可欠である。

2. 生涯教育の意義と目的

ここでは、とくに高齢者に視点をあてて、生涯教育を論じていく。

平均寿命の伸長により人生設計や生きがいについての考え方が大きく変化してきている。そ

こで、高齢者の教育の問題が重大であることを再発見し、改めて、高齢者の教育の意義について確認を深めていきたい。ライスサイクル、ライフステージという言葉が、心理学や社会学、教育学の分野で脚光をあびてきた。このような考え方は、加齢に伴う全生涯にわたって継続的過程として見られるものであり、人間の発達は青少年期までとする伝統的観念を覆す発想に立っている。

日本において、「人生50年」という考え方は、戦国時代から今から40～50年前まで続いていたと言われている。近年では、男女ともに平均寿命が延び、「人生80年」と言われるまでに伸長したのである。この大転換は、人生設計の構造変化をもたらしたことは過言ではない。昭和初期の人生50年時代は、平均子ども5人を生み育てることで人生のほとんどを費やしてあとは「余生」として余った時間を過ごす程度のものであった。しかし、現在では、子どもの平均出生率は1人であり、子育てが終わり、ある一定の社会的な役割、定年をむかえていたとしても、あと10年以上の老後の生活が存在しており、人生50年時代の「余生」とは全く異なる形の余生を過ごさなければならない状況となったのである。

このような高齢者の状況において、生きがいを感知して生活できた場合は、自分の人生に悔いが残ることは少ないであろう。反対に無為を克服できないである場合は、絶望とあきらめを感じる事が多いと考えられる。このため、自分に人生設計を考案することができるようになった今日は、高齢期における安らぎと生きがいが共存する生活をもつことを求める傾向が高い。

また、人生50年の時代には、青年期を中心に人間形成や知識・技能習得などの蓄積が、今日より重視されており、幅広く支持される場所であった。教育とは、青年期までの知識・技能の蓄積に、もっとも大きな役割を果たすものとして位置づけられていたと考える。戦前の教育は、義務教育を中核においた学校教育が基本をなしていた。少数の児童は中等学校に進むが、大半の児童は義務教育が終了した後、職に就いたのである。こうした戦前の教育は、青年期において蓄積した知識や技能が、生涯にわたって活用でき普遍的なものであった。

人生50年から80年の時代に変化は、こうした義務教育での知識・技能の陳腐化現象が速度を増して展開したのである。簡単に論じるならば、義務教育段階で蓄積した知識は、5年と経たないうちに古い知識として扱われるようになったのである。そのため、近年は自らの人生設計をおこなう時に、しばしば高齢期に対する不安や戸惑いが生まれ、その時期の生活設計への関心と配慮する姿勢が高まってきたのである。とくに、高齢期の生活の安らぎと生きがいを両立させることは緊急の問題として登場してきたのである。その解決のひとつとして、生きがいを感知し、創出できる能力の育成と開発に役立つための教育・学習による課題解決の道がある。

そもそも、教育とは、人々の学習を援助する働きを意味するものである。学習とは、個々人の自己形成の営みであり、教育のよって助けられるという関係にあるともいえる。学習を個々人の営みであるというのは、学級やサークルなどで「共同学習」も個々人の自己形成の働きであると考えられる。このように、学習は個人でおこなわれる単独のものもあれば、集団で共同

におこなわれることもある。

高齢者教育の関心は、1965年のユネスコの「生涯教育」に由来するところが多い。多くの国々でその理念が根付いていき、制度化と生活化が試みられてきた。この動向は、社会の構造変化とともに、学校教育の普及がもたらした学校教育の危機的状況にも関連しているのである。この生涯教育は、適時適期に個人が必要としている学習を、適切に援助するために教育を再構築するための施策である。つまり、学校教育を中核になっていた従来の教育体制の再編成をおこなってでも、全ての人々に学習する機会を保障しようとする社会的構築を目指すものであった。生涯教育の理念の根底には、人生の全過程を通じて人間の自己形成の完成を目指し学習を継続することが理想であり、またそれをおこなわないと生きていくことが非常に困難な状況になっているのである。

このように考えると、高齢者の教育や学習は、生きていくうえで重要なものであり、学習を継続していくことが、生きがいや安らぎを生む基盤を構築することができると考えられる。1965年以来の「生涯教育」のあり方や考え方は、日本社会の中でも浸透しつつある。高齢者を対象とした資格取得のための講座や教養の養うための講座など、多種多様な講座が開講されている。しかしながら、これらの講座の多くは、元気で活発な高齢者を対象としたものであり、寝たきりや施設入居者には対応したものとなっていないのが現状である。そこで、施設に入居している高齢者を対象にインタビューをおこない、施設での取り組みがどのようにおこなわれているのかについて次章で論じる。

3. 施設の高齢者の実態

施設に入居している高齢者は、自己実現としての生きがいを何に求め、また、どのようなことが施設内でなされているのであろうか。ここでは、筆者が施設に入居している高齢者の方にインタビューを通して分析する。

事例1 【高齢者の生きがいに関する意識 Aさん男性 80歳】

施設にいる高齢者の生きがいとは一体何なのか。また、施設での生活をどのように感じているのか。

筆者：ここに入居して何年ですか。

Aさん：ここきて、2年になる。

筆者：今一番興味があることはなんですか。

Aさん：みんなと話すことかな。それと、若い人（介護福祉士）が色々と催しをしてくれることかな。

筆者：いつもお話をしてるんですか。

Aさん：誰かと話しているか、テレビを見ているか、部屋で何かしてるか・・・。

筆者：嬉しいことはなんですか。

Aさん：う～ん、わからんな。

筆者：今は、楽しいですか。

Aさん：一人で暮らしていたときよりは楽しい。

Aさんは入居して2年であり、妻をなくされて一人で暮らしていたが、子どものすすめで施設の入居することになった。彼は、非常に明るく元気な高齢者といえる。人と話すことが好きで、部屋にいるよりはオープンスペースで多くの人と話していた。また、介護福祉士がおこなうレクリエーションの時間が楽しみで、いつも積極的に参加しているということであった。

施設での生活にはかなり満足している。彼と話していると、どちらかという社交的な感じを受けた。このような点から、彼の生きがいは社会参加ということがいえる。施設内の行事が、地域として考えて場合、積極的に地域の催しに参加し活躍する場を求めていることがいえる。

事例2 【高齢者の生きがいに関する意識 Bさん女性 82歳】

筆者：ここに入居して何年ですか。

Bさん：確かあ～・・・3年目かな。

筆者：今一番興味があることはなんですか。

Bさん：本を読むことかな。

筆者：どんな本を読むのですか。

Bさん：色々な本。でも最近は、目が悪くなって読むことがしんどいね。あまりひどいと見てもらいますよ（医者に）。

筆者：嬉しいことはなんですか。

Bさん：やっぱり、孫が来てくれることかな。

筆者：週に1回くらいは来るの。

Bさん：まちまちかな。孫がすごくかわいくて、色々なお話を聞かしてくれるの。なんか、孫が元気だとすごく嬉しいね。だから、来てくれるとすごく嬉しい。

筆者：今は、楽しいですか。

Bさん：生活には満足してるよ。でも・・・。

Bさんの場合も、Aさん同様にすすめられて入居した。彼女も明るくて、よく話す高齢者であった。最近、文字がかすんでくることが多くなり、本を読む時間が少なくなってきたということであった。やはり、高齢者のためか健康に気を付けている感じを受けた。とくに、目が

かすみだして文字が見にくくなると、休憩を取ったり散歩して目を休ませるとのことであった。また、あまりひどい時には、医者に見てもらい処置をうけるのである。一人暮らしをしていたりすると、健康の面などでは施設の方が整っており、家族も安心できるのである。高齢者の一番気にしていることが、健康であるということも納得できる。我々は、目がかすむと目薬をしたり休憩を取ったりして、すぐに作業に向かうことが多い。しかし、高齢者は目がかすむという生命の危機ではないが、我々から見ると、必要以上気をかけたり気にしたりしているようである。やはり、高齢者にとって病気、健康を損なうことは我々が考えている以上に、心配事であることがわかる。

また、孫の健康という面にも気にしていた。これは、家族への健康に対する意識が強く、また自分に対しても注意しているのである。「元気」だという言葉にもあるように、元気でないと会うことができない状況を物語っているようであり、そのために自分の健康に気を使わないといけないと厳しく自分を管理していることが伺えた。Bさんの場合は、孫に会うことを生きがいとして考えているようである。その根底には、高齢者が抱える健康の問題が存在している。ここでの生活の点では、満足しているということであったが、やはり孫と一緒に住みたいという願望があるようだ。しかしながら、子どもの考え方や家の状況など、なかなか思うようにはいかないようである。

事例3 【高齢者の生きがいに関する意識 Cさん男性 85歳】

筆者：ここに入居して何年ですか。

Cさん：2年。

筆者：今一番興味があることはなんですか。

Cさん：静かなところで好きなことをする。

筆者：何をしてるんですか。

Cさん：色々。

筆者：嬉しいことはなんですか。

Cさん：自分の好きなことをしているとき。

筆者：嫌なことはありますか。

Cさん：それはなあ、レクリエーションだ。あまりやりたくないんだけど、誘いに来るしみんながやってるから、しょうがなくする。でも好きではない。せっかく、やってくれてるからな・・・。

筆者：強制ではないんでしょ。

Cさん：うん、そうじゃないが・・・。

筆者：今は満足ですか。

Cさん：まあ、そうかな。

Cさんは、社交的な方ではない高齢者であった。好きなことをコツコツ一人で楽しむタイプであった。なかなか自分の思っていることを話してくれずに苦労したが、嫌なことになるとこちらから話すよりは、自分から色々なことを話してくれた。彼は、自分一人で楽しむことを生きがいとしてもつていた。しかしながら、その点については詳しく話を聞くことができなかった。また彼は、家族がいなくここでしか生活をできないとわかっているのに、多少の嫌なことや不便なことは我慢して生活しているようであった。とくにレクリエーションの件が、もっとも嫌がっていた。人に誘われると断れないタイプであり、もうここでしか生活することができないことを理解しているので、しょうがなく参加している。施設といっても、生活する場所であるから人間関係や近所づきあいみたいなものも存在し、社会の縮図であるような感じをうけた。

レクリエーションも同じようなものが多く、そのレクリエーション自体を楽しんでいるのではなく、近所づきあいというか周りから排除されないように参加しているように感じた。排他的に、いじめられているような光景を目にすることはなかったが、見えないところでそのような状況が潜んでいないとはいえないであろう。やはり、施設といっても人との関係を築いていけないといけなことは当然だが、お互いに監視しているとはいわないまでも、ここで排除されたらいけないという思いが伝わってきた。施設といっても、順番待ちを余儀なくされるところや金銭面などの折り合いを見ないといけないことから、一度入居したらそこでその後の生活が続けるということが前提になっており、仲間同士の関係が学校や職場以上に厳しいものかもしれない。

事例4 【高齢者の生きがいに関する意識 Dさん女性 75歳】

筆者：ここに入居して何年ですか。

Dさん：1年。

筆者：今一番興味があることはなんですか。

Dさん：今はね、色んなことをしてるの。これは、裁縫とか何か色々。

筆者：楽しいことはなんですか。

Dさん：だから、興味があることを色々してる時が楽しい。

筆者：嬉しいことはなんですか。

Dさん：やっぱり、孫がね・・・。

筆者：どのくらい来てくれるの。

Dさん：日にちは決まってないよ。

筆者：かわいいでしょ。

Dさん：うん、そりゃ、かわいいに決まってる。私はつくったものあげたりすると喜んでくれ

るし、なんか元気をもらってるの。元気っていわれることが嬉しいのよ。

筆 者：何かみんなでやってることってありますか。

Dさん：裁縫とか・・・。

筆 者：満足してますか、今は。

Dさん：それは。満足してるというか色々してるからね・・・。

Dさんも孫との関係を非常に大切にしている感じを受けた。Aさん、Bさんと同様にすすめられて、入居した経緯がある。まだ、入居したばかりで色々なことに積極的に関わっている点が印象的だった。まだ、年齢的にも若いというところもあるかと思う。彼女も健康でいるということに生きがいを感じていると思う。健康で元気だからなんでもできるというニュアンスの言葉を多く話していたところも印象深い。ここでも、孫との関係が非常に大きな意味をもっていることがわかる。満足はしているものの一緒に暮らしたいという欲求は存在する。

また、彼女にもそうであるが、孫や親戚が来ることに生きがいや楽しみをもっている高齢者は、非常に健康にたいしての意識が強いことがわかった。健康でないと会いに来てくれないという思いがあることはいたたまれないが、逆に、健康を害して面会に来てくれない状況になったらどう対処していくのかが、いずれ訪れる課題ではないであろうか。「元気」という言葉は、高齢者にとって非常に重要であり、大切なことを意味していることがわかった。そのために、無理をしてがんばっているような感じをうけた。

事例5 【レクリエーションに関する意識】

ここでは、施設に従事している職員である介護福祉士に、レクリエーションなど施設の状況とここの高齢者の生きがい意識について質問した。これによって、高齢者と職員との間に意識の違いがあるのかについてみる。(介護福祉士Zさん女性23歳、Yさん男性28歳)

筆 者：いつも、どのようなことに気を使ってますか。

Yさん：健康の面かな。それと怪我のないようにきをつけてます。

Zさん：施設内で怪我がないようにと・・・。

筆 者：レクリエーションは自分が考えてるの。

Yさん：そうですよ。何かすごく大変。まあ、なんかやらせておけばいいんですけどね。

Zさん：そりゃ、大変。おなじことはあかんしな。

筆 者：入居者には何がしたいか聞かないの。

Yさん：無理無理、そんなん聞いてたらやってられへんは。

Zさん：聞かへん、自分だからってにやってる。

筆 者：高齢者の方のことをどう思いますか。

Yさん：そりゃ、入居者の方がいい感じで過ごしてほしいけど、忙しすぎてかまてられない。

Zさん：忙しくてね……。なんか、ゆっくり話できるほど今は時間がない。

筆者：この仕事をずっと続けていきますか。

Yさん：できる限りね、でも体がもたんわ、給料安いし……。

Zさん：するつもり、でも体が……。

YさんとZさんは同じ施設で働いている人ではないが、答えてもらった内容を見るとほとんど同じである。介護福祉士として働くにあたって、高齢者とのゆっくりとした状況で作ることは困難であり、日々の雑務に追われる毎日である。確かに、施設によっては、人数が少ないところや色々な雑務をさせられるところもあり、一概に同じようなことを論じることはできないが、彼ら彼女たちが日々忙しい状況の中、レクリエーションなどのイベントなどの作成をしていることは理解できた。しかしながら、それが入居者の要望なのかということそうではなく、いくなれば彼ら彼女たちが、都合の良いように作成されたプランともいえる。だから、そのようなイベントは決して入居者の視線に立った活動ではないのである。

入居者のインタビューからもわかるように、多種多様な思いがあることから、それを全て聞き入れることは不可能であるに違いない。しかしながら、入居者の生活の場であり、生きがいを見つけさせる環境を作らなければ、施設入居後、無為のまま人生を終わる人もでてくるといえよう。入居者は生きがいを見つけ、施設側はその環境を整えることが必要ではないであろうか。

健康や怪我という面でも気を使っているが、いらぬ用事が増えるという意味と問題を起こしたくないという面が強調されていたように感じる。しかしながら、介護福祉士という職を目指して勉強をしてきているので、人との関わりが嫌いではないと考えられることから心底そういうことを思っているのではなく、今の忙しい状況の中では、そうするしかないような面も見えてならず、職員の増加や給料、就労時間削減など今後の課題であるといえる。

また、彼ら彼女たちに、入居者の生きがいという点までは目が行き届いていないといえる。生涯教育や高齢者教育ということについても無知であり、世話をするだけの人であるかのようであった。

4. 今後のあり方について

施設に入居している高齢者の生きがいについて論じてきた。施設で生活していることから、経済的には自立しているといえるであろう。保健や安全、医療などの面においては、安心して生活することから、安らぎという面はほとんどの入居者がもつていたと思われる。また、生きがいという点では、個々人の多種多様な生きがいについて論じてくれた。健康であったり趣

味であったりと生きがいをもっている人の方が、生活に対する満足度も高く、今後施設側は、どのように入居者に生きがいを持たせた生活環境を整えていくかが今後の課題となろう。

また、生きがいや健康といったことに対する知識をもった職員の教育もまた必要となってくると考える。現状の職員では、多種多様な要望をもつて入居してくる高齢者に対してどのように接していくのか、施設内教育ということも必要となってくる時代は近いように感じる。学校教育現場でも、多種多様な子どもたちの増加によって、学校の教員はその対処に時間と労力をつぎ込まなければならない状況となっている。同じようなことが、福祉の場においても問題として浮き上がって来ることは間違いないであろう。そういう点も含めて、施設での環境の整備と人員の配置等が早急の課題である。

最後に、今回のインタビューから施設内での問題について分析を加えてみる。健康という面とも深く関わってくるが、「元気」という言葉の裏にも生きがいとの関わりとして考えなければならないことご指摘できる。事例2・3の場合がそうであるが、健康でいけないという点は、良いものであるといえるが、その動機が孫に会うためということである。それを否定することはできないが、孫が大きくなり会いに来てくれる回数も少なくなった時に、入居している高齢者は何を生きがいにしてどうするのであろうか。また、「元気」だからというように、常に元気でいないという状況も高齢者には、かなりのプレッシャーと重荷になっているように感じる。「元気」という言葉には、本来そなわっている意味での、ほんとに健康でいて下さいという意味と、元気でないと会わないという意味も含んでいる点が斬新であった。

おわりに

今回のインタビュー調査では、生きがいという点から健康ということが多くの入居者の間では、最重要認識としてもっていることがわかった。健康という面がもっとも多いということは、入居者に限らず一般的な家庭に住んでいる高齢者にとっても同じことであるということがいえるが、その理由が特殊であったように感じる。孫や親戚がいない人は、健康に注意を払っていないかというそうではないが、そのような来訪者がいる入居者にとって、元気でいることは、生きがいでありまたプレッシャーなのである。元気にしていないと、顔を見に来てくれないとか、職員に電話してから来訪する家族がいるということも聞き、健康でいることが生きがいであり楽しみである。逆に、健康でいなかったら生きがいも楽しみもない状況に追い込まれるという二面性をもつていたのである。

生きがいというものは、個々人によって異なるものであり、自立という面から考えても、自分で生活していく以上必ず必要なものとなってくることは違いない。神谷美恵子は『生きがいについて』³⁾の中で、「人間から生きがいをうばうほど過酷なことはなく、人間に生きがいを与えるほど大きな愛はない」と論じているように、高齢者だけでなく人間にとって、生きがいは

重要なものである。そして、生きがいというものはなかなか人から与えられるものではなく、個々人の内面的な養成にかかっているのである。しかしながら、では第3者が何もしなくていいのかというとそうではなく、生きがいをもてるような環境の整備とその要求に応えることのできる力量ある人間の育成が必要であると思う。

最後になりましたが、今回協力して下さった施設の方々並びに入居者の皆様に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 塚本哲人『高齢者教育の構想と展開』全日本社会教育連合会、1985
- (2) <http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/data13/1-04.htm>より作成
- (3) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980

〔参考文献〕

- 岡崎裕司編『社会福祉原論』佛教大学通信教育部、2002/10/11
- 西岡正子『生涯学習の創造』ナカニシヤ出版会、2000
- 金子勇『地域福祉社会学』ミネルヴァ書房、1997
- 住岡英毅編『生涯学習』ミネルヴァ書房、1994
- 白石克己編『生涯教育への道』生涯教育事業センター、1987
- 塚本哲人『高齢者教育の構想と展開』全日本社会教育連合会、1985
- 大塚達尾雄編『入門 社会福祉』ミネルヴァ書房、1982
- 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980

(ふじた ともゆき 教育学研究科生涯教育専攻博士後期課程)

(指導教授：田中 圭治郎教授)

2002年10月16日受理